



重修真書太閤記

七編
二

天
正
十
一
年

~13
459
62



持 18
門 459
卷 62

消
川
流

重修真書太閤記七編卷之四

百姓ひやくしやう太郎助秀吉たうらうすけひでよし瓜うりと獻けんむる事こと

并秀吉諸軍ひでよししよしゆんと勵げんまはる事こと

信孝のぶたかより申まをされ光秀みつひで追討おいつの宣旨のせんし諸卿しよしやう僉議けんぎありて下くだささむ明養寺めいようじ手てと空くうしくして罷まうり歸かへりておのづかも今度こんどの合戦くわせんいりあるべしと危あやぶるおのゝ人も多おほり多おほり尼崎にさきより出陣しゅつじん延引えんいん及およぶ處ところへ羽柴はつち筑前守ちくぜんしゆをよほされこれを聞き主親しゆしんの仇かたきとらつゝ又また諭旨ごんしも宣旨せんしも及およぶとてたとへ申まを請こて御ごゆるしむこととてそのまゝに打うちとて置おべし

同
會
攻
印

大月巳二編卷四

にあつたさればこそ不俟戴天のうへささるとい申な
まとして直軍勢の手分をたしける處へ六十有餘
み見ゆる老人ころろのめい瓜を籠み入て荷せ
來りされ河内國若江郡高井田村百姓太郎助と
申のめい筑前守様へ御申次下されゆへと高
聲みよげとあもされば田舎めささう筑前守あれ
と聞てその者是へと喚とらうい恐まげもあく筑
前守の前又出ると秀吉大音よそ太郎助めづら
や大事あつくころめとといささしくにつは老人
あこころささう御久らうまらめつく何処と
を仰られぬ御氣色世もめてたさ御本せうそれ

ふ付ても上様御車くちおしくて日あも夜あも
泣あうあめれ光秀め喰付てなと恨とらうさん
とおめい立とて一度々なれど年いもる手足いか
かゝる御前まい備中國よそ軍あされ御暇あ
とゆらいうあもして御のありとと待よあちこる
今日といふ今日とてやう光秀めを此瓜を割と
く切崩し我等が蟄懷をくたく先年上様より
賜るりの銀あくと求得たる耕地の明地又植し越
瓜の炎さ時の喰のめと一川ものこさば切取て参
りゆとてさし出をば筑前守大よりとて何とい
ふぞ明地よりへ瓜の暑さとさの喰のめ故一川

も残さば切取しとふそれらを秀吉が心のまゝに
切さうんと第一むんよあれを取刀とぬきを豎よ
こりまよ豎よわり四方八方がよささるけくさても
一段の味ひやと舌ついでこらちつ神戶殿よと
め奉りそまより丹羽池田中川高山蜂屋鹽川以下
の諸侍大将へ次第よふとらとこそのうち秀吉老
人よ向ひいうよ太郎助その方へ上様のそぶりの
御恩ととをれもをる龍様よあめひ川めし實以
て難有あろろなをそれよ引くをり多くの國郡を
賜らうて萬人の上よ立たうこれと御恩とあめ
ひもをばいさうよ世ととと欠侍の其方よ何と

てあめてのあをさるづとこの時の喰の得さ
せたる老人が志とバ喰をてのちよど厚く報ふ
づこれいそれまでの質よ取とととを備中よ
う尼崎よで腰よ付て片時もをかさばりよきたる
革の袋と太郎助よあをあづけたれ抑この老人の
大坂石山本願寺と織田殿の責あひし時下間法橋
鈴木源左衛門が謀ふらをあひりく危あさ
目見あひ辛くして其場と道とあへとも續く味方
いなり詮方あさらうの老人の家よ立り納戸の
奥よくして漸後と一勢を待つけをりし其時よ
上様より黄金多く賜らうつとべ老人あれを否申

けり様我等御覽の如く年老ては寶多くは煩
まゝ多し故にうあと云ふ若く健うなるもの押入
たらんみちをゆくべし力なりこの拜領の金のた
めよ老う命と失ふひはゆる御恩ゆつらく仇とあ
りいづと申けるまゝその時其方の我を見知
つるやと仰らまじうを老人答へ申様若くはひ
時だは物忘れとる病のひあまう此邊鄙に住處の
とめて世とさげすひらう殿を見知奉るべしと
申ひあまう某御側より是は尾張美濃伊勢近江の
國主織田殿みあまうすはやくさうべしに計ひ
て得させんとそをれぐ肝煎その黄金あて耕地

多く買きて老う身の養ひまじくはゆるその
御恩とことれを明地は植へ瓜と一川ものことば
切取て来しと云名詮自證とやゆふともあり明
地いそふもち明智あり瓜は人の首み似たりをれ
と一川も残さば切取とい明智がこの首と一川も
残さば切取べしといふ詞の前表りの太郎助にい
ゆる民の身ながら故殿の御恩とおゆつばあそ
るふくと河内の國ありさうまてたづさく來せる
志のあつと歴々の武士もをよぶまじそれよあ
そをて光秀め越前と浪人して美濃へ來りし時の
弊は小袖ふ布の上下藤卷の刀口さざりをまじり

扱ふ武具もなす元より算勘の功者ゆえ普請の奉
行どよめ勤め材木釘大工少工の損失なく造營の
日次ふ過不及なうりしを以て織田殿これと不思
議の名人と御目と掛らる日々ふ出頭して暱近を
しゝどに鉄炮も妙と得しことを聞食と足輕少々あ
づけむひし仕合よく働さしあう遂に侍大将
となり度々意の軍をいりし一郡の主となり引
つゝ一城の主となり末は丹波一國を領し織
田家普代の衆の上ふ立し身なり殿のりみど非道
の事ありとも我身の元とく見て其恩の重さ
ことおのひ知へしとる龍のあくく大逆罪を犯し

しとたれくあくしとらるるべしとる老人
時の恩と等閑とをばとる道のいととる出陣
と祝して訪來し志をおのりし累代の御恩とらひ
國郡を領する身なり一日片時も猶豫をくさふあ
らに頃の軍へ風の如く逆の徒は草と似たりされ
ば草木として風ふのべふさぬいあ一面々の忠義
心の厚さ薄さはこの度の軍功ふあらしむと知
べさなり論旨のあるなりしとるるは明地の
瓜をのこりやく切取りしと云詞の吉兆たとへば足
利尊氏卿の勝持寺にて旗竿とさうあひしもそり
らに宿りし寺の名を問をえへば勝て持といふ

字を賞翫あぐり故とらうまの九郎判官義經の勝
牟の明神の前より軍をこゝめ勝浦といふ里より
あうて戦ひをのどまれ前蹤を以てあめへい今
度のいささの利運たるさうさうひなるといふを
しういひげきもまるとに然るべるといふを進てう
ちたちけり

或云河内國若江郡高井田村の摂州東生郡小隣
子とあそむ王造口より南都への街道なり此邊
今あを成の名ふ立一処なり青く筋高く味とに
まぐとたり太郎助の飯島氏なりその子と太郎
左衛門と云秀吉の重恩と忘さうの籠城しける

が元和元年五月若江の軍に戦死したりその弟
と源左衛門と云若江郡岩田村に住太郎左衛門
に男三人女子二人ありいづれも父戦死の時
幼推なれば母に從て泉州にゆく居御ゆき
と蒙りしもの諸家み仕ふと云源左衛門の家今
に繁榮せりと云

池田勝入齋先陣と望む事

并秀吉理解高山右近大夫先陣の事

池田勝三郎信輝入道勝入齋の故右大臣家と乳兄
弟なりしうい一方なりぬ親あつくめりそめふも

御側と立ちまゝとてなうりけるが西國發向のこめ擾
 州池田も下向し軍勢を集め糧料と支度と一問ふ
 本能寺の大變を聞くと馳登り光秀と討んとあ
 せらまけるを伊木清兵衛荒尾莊右衛門等これを
 諫めけるに明智が大逆の我君御一人の憤りある
 右大臣家の公達信雄信孝おろし上嫡孫三
 法師君と復讐追討の本主ふまゝに御
 家臣の柴田瀧川丹羽五郎左衛門羽柴筑前守と
 是等と御申合の上と十全の勝を取づくは何ぞ
 御一人して暴虎馮河の勇と振をあらふべしと詞
 とつと理とさめて禁めし勝入齋いとうと

あゝとてまのこを延してけり

勝入齋の母尾張國住人池田紀伊守政秀女
 う信長公の乳母と云と以濃州永良庄の地頭
 と賜らる養徳院尼といふ父勝三郎恒利實の述
 江國住人瀧川義作守伴貞勝の子なり初瀧川女
 蕃允養子とて瀧川九郎範勝と云然らば玄蕃
 允實子出生せしうべその家と立退河州攝州と
 徘徊し義晴公に仕後浪人して尾州み來り池田
 政秀の婿となり信輝と生といふ
 あゝとて處ふ羽柴筑前守備中高松の城と攻めと
 毛利と和睦し人質と取加勢と引率して尾崎まで

到着し明智退治の手配りと申す由と聞とそのま
は信輝落髪一番ふ馳加と申す筑前守と對面し
所望しけり某事存知の通り故殿の乳母子
申と以格別親しく愛惠を蒙りけり柴田丹羽
龍川などの旧臣も猶重くめし仕られけり
とバ本能寺も同しく隨身をべりけり
出陣先鋒とありけり以て櫻洲ふ下向殿の發
向と待たてやめんと最期の供つりけり
身が今まて生のころていささか殿のまぢあふ
なしくんめのをせめて在せよ定めあひし先鋒なり
此度の先陣と給ひけり餘儀なく申出しけり

前守もいふと申すと思案しける處は高山右近
大夫長房これと聞池田殿の先陣と望とありけり
の道理ありけり聞えていたゞ今度の軍も於
てい先陣の某ふめづりけりその故けり
に某居城高槻の明智が領知と相とありていへ
雞の聲で聞るれけりいとのをうけり案内者あり
めり日頃の言葉をめりけりめりどもありけり
に仰られけり他人とゆぐるべきとありけり
けるを聞中川瀬兵衛清秀とみ出けり申様某も
先陣と心掛ていひけり高山殿の御申分あり
もその理よりけり最初ありの所存とありけり止ま

うひ然者池田殿の御領地の花隈なる攝州よても
西の極よひ清秀が次よ御進こひらんことまこと頃
路よおぼえいと申せしと聞て勝入齋のつぎもの
御理解まことよ當然よひたご某こひ右大臣家こ
同年と申幼稚のうの愛著親暱よことよ以て餘人と
いこの外あつゆめのをいづもをのく御ゆる
しをあみむつたしとひごごご申せごも高山ま
ごに高槻よありて先陣仕らびの生て二度人よ面
と合ごべうらびと云
勝入齋の天文三年甲午の生りて今年四十九才
中川瀬兵衛清秀の天文十年辛丑の生りて今年

四十二歳高山右近大夫長房の天文十一年壬寅
の生りて今年四十一歳と知
勝入のさ福て申様二所よの年若よ被為在之ハ
の後のくごの功名も立申下我等の年老その
上よ此度の戦場よて必定戦死して故殿の三途よ
もちあふらんよ追付申下とれりひごごめて
へいまのげく此入道よ賜りゆへとおのひ切て申
出されしよ中川瀬兵衛のうも入道とのらひを
是の昔趣の聞えていへごも高槻よありなごら他
人よ先をうけられごのとひごご高山とのら申
条これよごごご高槻の無下よ京都へ近け

大開言十編卷四

是ハ京もても高山とあり旗馬印と知ぬめめのお
 ぶまうけは京勢とたうひは打合たらんとと鴉
 といふ文字の見えとんハ高山のうふをやらん
 といふれんといふにも口おしくゆべれをよ
 次てあたさ合やうの人も人よりはさし紋を
 是ハ中川ふげしといふれふバ末代までの瑕瑾を
 うさればあそこの先陣二陣のゆりめさくゆを
 是その上ハ池田どのの攝州もて中より西のめ
 たふまうまをば京童もさるどあぬ知ゆをうの
 ら老輩もまうまはちやう弱冠ととむとの様に
 先を争ひあふもあとのげやうといふをも聞て勝

入類ハ先鋒ふさくまんといふれしうハ高山怒
 て申けまはさてもはるを聞てげのちの池田どの
 かの京と高槻ハむげ又近
 京都より東寺四塚鳥羽塔森のら川をさるり
 下久我ふのりハをさ川をさるり下植野勝龍
 寺の城右よりあり圓明寺川をさるりハ山崎あり
 かの行程今道四里半山崎を以て山城摂津の堰
 とハ堰を越て攝津島上郡廣瀬鶴殿前鳴高槻を
 うさるり五里半あり
 花隈より高槻まで行程十六里及ふ池田殿たと
 ひ先陣をうけ取りあふとも爰までありあふよハ三

日半を經ぬるべしその間某ありありて池田殿
 とす申さんことやまことに難義あるべし軍ハ十三日
 辰上刻と定めらるたり今日十一日の申刻過たり
 いくよのあふとも花隈の御勢をおいあふあひご
 我等々めのもに見物をと申さんやや心見
 物して居申す必定喧嘩及びいへて大車
 前の私軍わくその詮たうるべし左いおがさ
 や中川どのとゆへ清秀ある様いりふもく
 我等が前を花隈勢のあさるを我等が手の
 厄弱めのもよを居候ありていあるやうさなりさ
 とバ高槻すてらありふや宿河原の邊より中川

原あさうまを司士いへて敵よこころれん
 も口惜しあうら高山殿のいふよあさうらひ池田
 どの三番ふあさをあへると云と勝入うけあをり
 二所のいをる處その理やると至極しそへど
 もこよめく先ふ申入しと若さ人々ふあしそくあ
 らは勝入がすけさうといとれい我手のりのに
 顔をむげぐ一本能寺あて御供とべる身の生の
 びくそちを見ることのうさてささうとて道理よ
 あつべし道もちあひ切てい人々うといふよ
 う早く腰の刀とぬさるふしとさうあつと見え
 けるを銃前守さつと見て勝入がめつとる刀を引

いふも腹さうあつての程なり。筑前これを勧め申
す。意と静めて筑前が申ことと聞あへ高山どのと先
陣後陣の争も一とて聞えてゆへども池田殿へ摂州を
西の極と領一あふが故。又西國發向の先陣を殿さう申
賜うをあひなり。その時高山どのの中川さう争ひあふ及
びその上は高山殿二千五百の勢なり。中川どの二千八百池
田殿五千五百をあへの数も格別也。高山殿十組五千あ
へ中川殿十一組を五千あへ。あふなり。ん池田殿御父子
ハ廿二組と五千あへ。あふけは。その勢どものめを口さ
み後さうもなり。聞けあへ池田殿といはれて勝入刀とさ
ゆ。納め何さま筑前守殿のいさ。あをむ。肝は銘し。

あつてのいふも御下知。從うて軍さへく心なめさ
詞のくさく老の僻とゆ。あへ高山殿中川殿とおと
なり。ゆふいれは。高山右近も争ひ募。詞のう
どくさ。さ失禮もゆひげん一向故殿の御為。と存じ
むらりの事。と老練の池田どのと角めだて。事今
更をぐ。くいとたうひ。和融なり。たり。あう。さう。手
配。あへ。と。さ。が。一。番。の。敵。地。は。近。高。槻。の。城。の。主。う
つ。案内者。といふ。と。さ。浅。黄。地。は。黒。く。鴉。といふ。字。と。書。た
る。旗。の。高山右近。大夫。長。房。二。千。五。百。餘。人。と。五。手。と。分。て。ど。あ
した。り。け。り。二。番。の。あ。る。が。茨。木。の。城。主。赤。地。は。白。く。抱。う
し。その。紋。の。旗。は。中。川。瀨。兵。衛。清。秀。二。千。八。百。人。と。これ。も。五

手ふ分たりけり三番いあるく有岡花隈両城のあり
白地よろろく鎧蝶の紋の旗の池田勝入入道嫡子紀伊守之
助五千五百余人ありく五手よとたりけり四番白地
に黒く三本爪の紋の旗の丹羽五郎左衛門尉長秀五
千余人五番白給の熊野三社の神号の旗の蜂屋出
羽守同兵庫頭千五百人六番赤地五七の桐の紋の旗の
旗の羽柴小市郎秀長五千余人七番窠の紋の大旗の神戸
の三七殿四千余人八番地紅五七の桐の紋の大旗小旗整
整とありたる五色の吹貫中空の幡翻たる惣大将羽柴筑
前守秀吉の本陣よと其勢二万余人と聞えけり
重修真書太閤記七編卷之四終

重修真書太閤記七編卷之五

光秀安土よと酒宴の事

并左馬助武畧評論の事

明智日向守光秀の將軍に任しける悦びとて公卿
大臣の御方あり宮方門跡諸寺諸山ありてふす
黄金白銀給綿紬布酒肴太刀馬等そねくふ残ふ處
なくこれを引たりけりいふけん賀茂上下と
そとめ大小の神祇の露むらりの奉幣もせざり
しうべき意と濁る人あくる祢宜神人のあれを恨
けるに光秀滅びくのちよあそ神の非禮とけり

といめふこと申べけきとゆめ同塵の末の
 世も和光を仰ぎ尊きけり叔も光秀ハ安土一發向
 きてと定めける由を聞て安土の留主居蒲生右兵
 衛大夫賢秀智勇兼備の侍あれば此城を運を聞
 くことよふも申さるべしとゆめ思設けし
 處なるとして右大臣殿の御臺所の御供して六月三
 日の夜半むらうりに日野莊へぞ落てけり
 蒲生賢秀くまひと云ふ藤太郎と云下野守定秀の長
 子なり今年ハ四十九歳長男忠三郎氏卿廿七歳
 の時なり近江國輿地志畧ハ蒲生郡仁正寺村南
 の山ハ古城趾あり中野の城と号と蒲生定秀在

城を跡也賢秀氏卿本能寺崩の時安土の城代
 と預り信長公の御臺所幼君と守護し此城へ引
 取勲功ありと云う安土より日野仁正寺中野ハ
 巽三里半餘あり
 又瀬田の城あり山岡備前守景友入道兄弟楯籠り
 橋板四五間引放ちて明智おそしと待と聞りの兄
 弟いたゞめのなうは是よりけ合兵士うとをく何
 うとん然ハ坂本より湖水をくくさんとする處へ
 坂本の留主居明智長閑齋が迎ひの船數百艘汀へ
 漕寄しうは是より打乗野洲の郡へ押らるる蒲生郡
 と追捕し觀音城と攻落し安土にむくとも蒲生

らそててよ落たり城みい支ふるのめなり光秀や
ぐく天守ののり東西四方とちふうめをもく
天守の經營の安房の里見義弘が三重の櫓を
めとれたる里見の鹿苑院將軍家の金閣三重を
本として治亂の時を別とせしなり周防の大
内義興の立たるも三重なり此作事の仕様の繩張
ありしてそれく故實のあることをたしるに知る
ら大内家の角隈右京といふのめなりそあるか
らん光秀さうい時その右京さう傳授して其式ふ
らう七重よの結構しつるなり我のめとなる時
ありけりと余念なく見られさう立たりけり

一書よ六月三日光秀右馬助光春と大將として
荒木山城守行重同友之允重仲青木主計頭範賢
四方田又兵衛政實今峯新助泰正三宅周防守業
朝以下三千餘騎と安土へさし向る勢田の城主
山岡義作守景隆この由を聞瀬田の橋を焼おと
防ぎ戦ふといへども明智勢川さうしてめを
さうしあり田上さうして引退く安土までもこ
の由を聞城中の女中幼稚の人々と引はれ日野
とさして引たりしう左馬助あさく四日の
晩景よ安土よ入城し織田殿のたくえへあひ
寶物どもを改めこれを目錄よ注し又兵糧以下

玉薬とらるるよめひしうも少ふりけし
 さけりの織田殿もうこれさをあつて前表
 御食禄盡たり一ふらんとはぶやさなうら天守
 みりさう石臺の藏を改めれば町とけけ十
 四間ふ十間高さ五間の處は兵糧も玉薬もりど
 もあつてまむたなくもへむえりと云う又光秀屋敷
 跡は安土の南豊浦村にあり
 光秀やうく酒宴とめりし諸侍をめり出しこ
 ろの殿よりこれさうし處はあつての柱の際にを
 しそめあひく悪口一あひし處なりその御襖の
 まへまで蘭丸よりこれしともありけりなと近き

ちろ殿ののの狂りし光秀とあつてあひしこを
 あつて出さしてのち光秀何とりあひけん扇
 を取立あがり頼政のうしひを謡ひ一さし舞た
 うしうは左馬助光春はとさしありて光秀の袖と
 ひうく源三位頼政の文武二道の達人とせよの申
 ていへども光春が心よあひし頼政女あれど
 もその身を全くとしそののへを治むるにあつて
 び武あれどもその君をたをけくあれをせよ立ふ
 ことをしえびと申べしいうあといふにいけあ
 やめと引ぞららふと詠たりしよてるや真の草
 蒲と知るるこい明白に聞えいさをれおあれあを

あめとくしとせしも又しうなるあめり知づる
び又のなるべきたうあめし木きの許もとは推いとひ
ろいともとくしふちとくしと三さん位いありしと
いふも虚事そとごとなるべしそれをいりふといふに推い
志し比ひして四位いの志しあるうけなりひの歌うたをさ
ご御賞ごうしょう既いあるべし世よまでもありし川が三さん位いなり
あひし平相國へいしやうこくの申請しんけいふ処ところあれを歌うたの故ゆゑとて
あしされ頼政たのまさの文ぶんといふいひなりひの歌うた
むむゆり五倫ごりん五常ごかうの文ぶんなり源太義平げんたぎへいといふ
むし一いち族ぞくと棄すし義ぎを知人ちじんといひひがこくま
親おや々の理ことわりとてこまにいと申まをべしとて他姓たせいの人ひとふ

追お從ひして世よみ立たちしるし恥ちとてぬ人ひとなるべし
次つぎは武ぶといふも弓ゆみと取とりて鷓せと射いされども人ひとと
射いたりし譽うたなり劍けんと取とりて御壺ごつばの石いしをバ切きといふと
も太刀たちうちして高名たかなの沙汰さたとさるは高倉たかくらの宮みやと
そこの中うちに奉ほうりしたぐり子の恥ちをわめよの
みまことに宮みやとせし出いしやいしをんとするべし今いまを
あし計畧けいりやくもあるべしに都みやこ近ちかき三井寺さんせいじ又また集あまりそ
とより宇治うぢへの南都なんとへあちあふこの川が
なさをみれば更さらは武畧ぶりやくみ長ながき所ところありありの
あし彼かそのそらうとて今日こんにちの愛度酒宴あいどしゆえんのさまといふと
たりしいまも今日こんにちの愛度酒宴あいどしゆえんのさまといふと

おのへびとぞめ奉りていといたひせは光秀も心
 や付たりげん忽ち拍子と取て調子とてははら
 のくまどらり頼ある中の酒宴うたと細の曲を舞
 その日の酒宴いさそそにたり諸将も次第退
 出し光秀光春た二人さむうひく居たりける
 時光秀ゆ様頼政と舞一某心と光春よりあ
 知たるとよやたごうわたり軍の事なれば半途
 して討死せしをいふととあひこのことなる
 かと問ひせは光春こころは様されば頼政は美
 濃守頼光朝臣の御裔なれば美濃源氏土岐一流の
 御内あてせは聞えし御大将よりゆえ殿ふ

も御賞翫あうて遊むされしなるべげととも光春
 があつろよととへ頼政朝臣の御事へ御感心い
 たさぬ處たれしそれゆえは殿の頼政朝臣なる
 ををあるんこのうとてくおのりえはゆ急し御と
 ども申てひひしなる殿の頼政と舞をあひし御心
 中とゆりしあふべきなる承らうゆらんと申け
 るよろう光秀こころは様されば頼政朝臣は美濃
 源氏なればといふもあはれ光秀これを慕ひしゆら
 短とゆふもあはれ光秀これを慕ひしゆら
 と深き心のあることぞやその方その意を知ら
 見えなれば事なりともあつろて聞せん抑朝廷

の衛府もろめい三川のちへ五川とたのこしうど
も其外は内裏守護のためとそ曩祖頼光朝臣とめ
されたり一めると大内裏炎上しそのちへ衛府も
名のこみそその實とらうひ九重といへども
御垣もろめいなるて内外のげぢめ定うあはる
し頼政朝臣もろめい大内の守護となうひ先祖の
跡と起これるやうく御門も兵士とそ置
朝夕は上下して護り奉るてなるなる頼政朝
臣一期の後ハ末子頼兼相續して守護となう其子
頼茂もあはる守護たりが承久のころめ叡慮は
たがふとあうて忽は斧鉞の誅と蒙るそのち守

護と補をくれざるうち主上上皇新院も遠國
御遷りあうてなる御門となく大内の守護といふ
力の絶たなりあはる光秀不肖の身なるも絶たる
職と繼て御門を守り奉らむやとおのひ立し
頼政のこひをばうこひありといふをさうて
光春もさうは歎息しあはる我ながらおのひあはる
うらあはるさうはたひこころに頼政朝臣一旦の
怒は年來の本意とせうあひあはるしを
のみ見知聞あうて口とてことと申出し
此一節安土の土人口碑ある処あり流布本宇治合

戦の評とのせさう今考ふるも三井寺より南都
 へ趣く高尾山より平等院へ出て長池玉水の
 う光明山の鳥井のまへより木津のりきり渡
 了奈良坂を越て南都に至るも但光明山より
 南都に至る二里半余平家これを追ふに三井寺
 より醍醐のりきり宇治橋のりきり知る頼政
 朝臣のりきり防に非びし何方あり於てせん
 宮の流矢に當りぬひし御運の上のとなり頼
 政朝臣父子爰に防ぎぬいり光明山まで
 至るぬべけんや頼政朝臣三井寺より宇

治へ至る道へ閑道ありて平家軍行の路あり
 び何ぞ伏せ置てさ又さかひとどりの鎧さとの
 歌の宇治の網代はあはる氷魚を緋緘に寄る
 戰場にて歌をよみ連歌をよみあど時と取ての興
 ちるべ勇非勇の論はあはる衣のさそと綻びよ
 びうとひひうけぬひ八幡殿をたむる勇か
 といふや年とア系のみだれのくささとい
 ひし貞任その勇を減るぬらぬ又埋木の
 花さくともなうりし實のちるさそとあそん
 ろうびうと云歌も彼是の論を誤也埋木の今
 いちうくといふ漢名無花果をささうばし實

のちのちあり

筑前守より明智へ戦場と約とる事

并光秀筑前守へ返答の事

日向守光秀の安土より一日逗留近江一國の仕置を
なすにけり又日野莊の蒲生忠三郎父子をのり從え
びらぐめある小城あればを寄て一時責め攻べ
るやらうよと評定しけり又日野の城の小あれど
も蒲生に名立る侍なりあれと攻りとも五日や十
日いららよべしその間筑前守も京都へ寄來
ふまじきにもあつべしと光秀京都へ引りけ
し蒲生に心のあつればあつと切從へ織田殿の

御臺所より幼稚の君達と安々とを參ら
けり安土とバ左馬助光春五千餘騎にて成るとい
へども二三里の外へ打つ出る及むに光秀京都
へ還り上り中國の左右と聞筑前守秀吉備中高
松と責めたり毛利と和睦し毛利の人質とよひ加
勢を引率して切上りたり又注進ありしに
和州郡山の筒井順慶この節大病して出陣を
あつてはるよりどころなく人数むくりと八幡の洞
が峠より出たりといひへど其内實を知らぬ
丹後の細川忠興の塔よりあり兵部大輔と八年
來の知音なりとも二心のあつと頼りたりと

八月廿二日

女とおくくううア一縁者のうーみを絶ううバ光秀
 大に仰天一立る松の下蔭は雨のとるころ地
 てさそぐら裏うあ一尼崎の七兵衛信澄へ心も剛
 に力もほろ一一方の大將軍あしたのりくたゆ
 ひたりいゆる過て丹羽五郎左衛門と討きた
 ふまめうその手の兵士若干みか京のわりて明
 智が手に加ふる如斯諸方の軍配相違しるゆ
 ら今度の軍は大切ありと光秀軍畧とさあぐみ
 らしげら処へ六月十一日筑前守の使者萩原七郎
 左衛門荒木平大夫兩人明智が許し来りしうバ光
 秀呼入て何事みやと問萩原荒木うしこさうて申

げら筑前守西國は下向し毛利と合戦し數城を
 下しその勢のうて藝州まで切入んと存し
 ひめらうその昔言上仕りていつば随分相働
 さしげらとの御下知もい又加勢とて明智殿を
 トめ大軍御下しの由御沙汰もいり中国の名
 所とも御覽あるべさため御下向の趣も御下され
 ては是より秀吉涯々の力とつくる備中国高
 松表の堤と築て俄は湖水と湛あうしゆひし
 待期をさして御音信もあし是はいつと存しゆひ
 しは不思議は御使のゆのう筑前守の陣中へ参入
 てゆにう御消息とひらさ見てゆへ筑前への

御書通よりなぐりゆへともたしう去二日右大臣
殿御父子と討をあひしとの事明白に記されゆ
あり秀吉の事と以て驚き入りそれより毛利と和睦
を取むるを責うしつて高松をばせぬあつて城
主兄弟に腹さるをそのち毛利の人質あつて路々
加勢の人数めしつていそをのりてい路々
も明智との御手の者と見へ途中み待てぬの申
されしぬのもゆひいぐとて是と切く捨あつ
りのおつていたし御座ところの都の内なり十
善万衆の君の御傍より弓矢を取てぬの申さん
もろより入りゆへ山崎邊まで御打出ゆへ

秀吉も後ほどをうりのおつて右大臣殿御父子と
うををあひし意趣を承らるるべしと申せと
の使よりと申あつて光秀心中より藤田傳八
めあやまうて筑前守の陣中へ入て消息をうむ
ましなるべし然るより毛利家より光秀の申
遣をせし趣とて和睦をいなるべしと申すな
あつ使者の口状と明石がひひつる詞と符合し
まは合いたし一戦と思ひ定むべし但山崎といひ
つる所へ尼崎よりあつふ地理よりこの方
いへうくおまひよりいへうくもろく推
出天王山とちらうして戦をいどむべしと心み

問心ふあへて使者に向ひ遠方の處態と使節
み預りゆと望の対るゆそのく光秀右大臣家の御
恩をゆりゆりゆと富士の山へ川てひさく近江の
湖へ猶あさくゆべし然るは右大臣殿の某と悪ま
せあふとも亦をてふ等倫ふ越てゆく川この度年
來御恩よさてゆひ近江國の坂本あふひ丹波國
とむめしそあふれゆひささるれば湖水よりも深く
山嶽よりも高き御恩をてふ無さるる新恩とて
賜むりし西の國々へゆまふ人の所領よゆへば
の車られひ可申たぬ御旅館へ伺候しゆひの
あふ御早まうて御自害遊をささしゆひをさ

とて朝廷よてい光秀が赤心をあらしめしを將軍
に補しあひてゆあり右大臣殿の朝儀を忽諸しあひ
しと多くゆり臨時は仰出されはる光秀さあぐ取
りあて今に御憤りも大さきことゆゆあり然るは山崎よ
て是等の問答よ及ぶさ由御使を賜りゆりゆへを
みやりふ出張をてゆ其時運を天の照覧よまうと少
しゆりびまゆむり長さ弓矢の瑕瑾ゆあふいと申使者
と厚くゆてやうゆりけり秋原荒木兩人へ尼崎へ立ち
り光秀の返答あふくと演説たりゆ筑前守これ
を聞充左もあるべしささるば打たてゆのともとて一勢く
り出光秀陣中よていこの日頃藤田傳八がゆり來ら

大問記二編卷五

ることをいふくおのひ居たりけるが秀吉の口状にて大
たいその消息を知るといふともいふも生死のさうひと
のや藤田秀吉は降参をいふあつとさうとさうと
と案に煩ひしとちなり

流布本筑前守の口状又日向守の返答共後人推量の語
ていふ足は今山崎宝寺は傳ふる処荒木平大夫覺書より
改作を荒木平大夫元來丹波の侍ありし流牢して中國
いさうりめて羽柴筑前守は仕むとめり平大夫が子平六
左衛門行成のちりし出家して宝寺々中住し蓬隣庵と
云々の軍功を記してせり傳ふ即荒木平大夫覺書是也

重修真書太閤記七編卷之五終

重修真書太閤記七編卷之六

明智光秀御暇乞の為參内の事

并山崎前日備定の事

明智日向守光秀は羽柴筑前守秀吉の使者叔原荒
木は百會し山崎出張の事と約束し心中ひそく
驚くといふともさあぬ体にて諸方の手配を定
めけるまの勝龍寺の城ある三宅藤兵衛定の城に
は亘理大炊助伏見の城より池田織部宇治城より
奥田庄大夫と籠置是は山崎の軍急なるんとし勝
龍寺淀伏見よりこれと援けし宇治より筒井

か後陣と喫留んとの謀なり

山崎より勝龍寺の坎に當りて十二三町又過
淀の良ふ當て二十餘町狐川の二二とて
伏見におあしく良ふ當り二里をめぐりて是の
山崎と勝龍寺とて援ひ勝龍寺と伏見あてたを
げんか為と知る又筒井ヶ洞ヶ峠より山崎へ向
ふ時淀より是を制せんためたるへ六月十三
日大暑節上元なり坎一宮甲子將あま天時直符
天蓬直使休門なり休門勝龍寺より山崎へ甲
戌將の泊る處なり甲戌將の直符天英直使景
門なり

江州坂本へ年來住居して百姓町人の心も知たり
是の山崎の軍ゆふと一時こころを敵とすべし
為ふ叔父明智長閑齋と籠ちて長濱の城の北國押
えの地といひ要害よりければ妻木主計頭をこ
めて柴田修理の上とをふを澤山の城より荒
木山城守安土の明智左馬助光春を置いて濃州勢州
尾州諸軍勢上洛よそあく丹州の自國なり洛中洛
外へ自身の居処よりこの日頃目出度やうな情
ふり取りける上將軍宣下ありしうの後い
らば眼前の身を賑ふと縁のこめと晝夜
いそぐ市をふりし門前又集ゆる誰々を伊

勢安房守同主水同監物上野統後守同大學この両家の
 先將軍義昭卿の殘徒一人々なり伊藤志摩守松山
 讚岐守後藤喜三郎磯野彈正阿閉淡路守同万五郎
 大津甚四郎多賀新左衛門鳥山王殿助賀河刑部久
 徳六左衛門逸見左助畑田主馬助庄田權之助松本
 主膳岡八郎大夫平田六郎次郎渥美徳岐守櫻井新
 五左衛門高橋希之助片山高屋日下部鈴木深澤竹
 嶋都筑落合西澤近藤渡邊井上留嶋小倉大沼清水
 高龍廣澤玉田神谷辻村由良吉岡津田志水等近
 江山城丹波摂津の國人なりりりも五十騎三十
 騎百騎二百騎めちたれば打つべく引もささく馳

集ふりどる光秀旗本の勢六万餘騎ふ餘りけりさ
 れ日本國が寄來るとも恐るべしにあらねど
 を毛利へ使とて下を藤田が事をあやまのつ
 羽柴ふ捕らむ四方田但馬守明石義大夫兩人が途
 中よまらむけ奸ふうげんとをうりも却て四方
 田に加藤ようこれ明石の事のちるを恥て自
 殺しうぬて謀りしをうりて一川とてあさる
 この口惜ひはとも然とて今更ゆむべしにあらざ
 るに羽柴と待て戦を決とて但平安城とて合戦
 をし保元平治とて近頃の應仁文明の亂京
 勢の勝るたれなり是は糧道運漕あさる

大関氏二編卷六

兵士第一 小はらうる 故とさげりその上内裏
中らうく 干戈を動し 鉄炮の響さ矢叫ひよ天聰
を驚う 奉らんを誠し 以て恐入てゆひし 筑前
守らう 山崎をてとい 此方らうもりのあひ設
けし 時刻たが 討て出運ふまうとて 雌
雄を決せん 武士の常ぞうした 軍の習
ひ生て 帰らんを 固し 内裏へ 御暇申べ
し 十一日の 早天 御太刀 御馬を 獻上し 其の
跡 引い 明智將軍 光秀を ちゆうし 装束し 其
つも 出仕の 御門 殿上の 口へ 伺候し 傳奏し 付
て 申げり 曩祖 義濃 守頼 光を 大内 守護 した

先蹤み 従ひ 追ひ 九重の 御垣 のり
に 恪勤 仕る 奉存 今度 羽柴 筑前 守備 中國
引返 切て 上る 由た 使と 越て 弓
矢と 身の 習ひ 筑前 守と 待む 弓鉄炮
一戦 仕る 鳳闕 ちり 弓鉄炮
を 以て 參會 仕る 事 筑前 守も 恐入 由申 山崎
邊へ 罷下 彼地 勝負 決し 可申 光秀 切勝 引返 先規 如
く 内裏 守護 仕る 光秀 討 是
ど 最期 參内 今生 御暇 申の 今
一度 龍顔 奉らん 願ひ 奉る 言上 奉


~~~~内裏も不便におがしめしつゝも  
あはて筑前守に言上を趣もありまゝ三七信孝  
より申上し旨趣もあまは御腦より海をて御  
前へいめされどたゞ天盃とて御土器むらうと賜  
るうけり

流布本難波宗豊郷久我吉通卿の執奏といひ  
つ光秀の將軍補を上の其方に向ひ戦をいど  
むいとうも直さば朝敵をうといひ説あれども  
更論は足見もの惑ふとあられ  
光秀御土器をいづゝ三獻のちあれと懐中  
内裏と退出し三條河原より出日頃貯へたり

軍用金を御所くと初め攝家清華のいへり  
名家羽林の官家両局藏人非藏人御藏小舎人出納  
雑色等に至りてこれを分散し猶のこれるをば  
町人地下人よりち與へられし諸將をめしあ  
つめ光秀が最期たゞ是今日とおふゆき面々も  
某らあはれと積置てひ金銀米錢の龜山坂本長濱澤  
山にあはれ悉くこれを配ふあるべし徒らとて  
置羽柴筑前守も得付あまよといひつゝとも誰  
一人某あれを賜るんとといふ人もあつりけり  
角をるゝどし時刻後とてうなむと諸方の手配  
定まれば光秀立上り某この美濃源氏よりて頼光

大開己二編六

五



の後と申せども遠らむらん人らば身のた  
 り無下又負しく朝暮の設たるる之れを世に立廻  
 るるもくわぐくくゆをさうくくこの述さすなれど  
 人みか知ておそれずそれが丹波近江五十餘万  
 石を領して金銀米錢の如くとがめりゆ  
 い身みなりあひひのそめく誰のちりて申せ  
 ば右大臣殿の御恩とたせめく申さるべしさりや  
 右大臣殿何とて五十餘万石をいたづらに賜つけ  
 んや賜てふさむど我身粉骨とくくく故のる  
 べしとこれば右大臣殿の御恩といふのの實に  
 我身の價ぞうし丹波國をとも元の内裏の御國也

それを後々波多野の一族所務してゆらん波多野  
 の内裏の罪人なりその波多野を滅せゆらん丹  
 波の光秀が進退なすゆるとゆるされゆらん丹  
 波元より右大臣殿の國といはれそれと我々の顔  
 不呉る誰うも御恩と申べし坂本長濱澤山の  
 ともいひて右大臣どの國郡をていひゆらん  
 我等種々又手立して切取ていとこれす殿の御  
 恩といふもくくくたといは猫鼠を取たるとさ  
 我思なうといふり如殿の情實なくありまると  
 の某うのふをまじひつとも存知の前あれば今  
 新らしくいふ及むれば羽柴筑前とて殿今一二

大隆言七續卷六

二



年もちろしきさば光秀とある様ニ播磨表作備  
前ふとせめしそふたふさみ光秀ゆゆ丹波坂  
本を召くへされし故ゆのまにちのうゆさて筑前  
一人故殿の御為忠ある様み見えくは百々もえ  
やく光秀を討て筑前が手よくそくう十五年も生  
のびあへうしとゆいどゆいづも百とたれくゆ  
あまの光秀ゆぐく懐中あり土器とり出しこれ  
そ今朝内裏にて賜りて天盃をれ百々も一同  
に賜りて冥土黄泉の土産とありあくとて大  
なる瓶子とり出し諸軍勢よあを酌をそのゆ  
中備の齋藤内藏助父子兄弟が勢千餘騎を大将と

して相従ふ侍の明智十郎左衛門柴田源左衛門奥  
田宮内同市助後藤喜三郎礮野彈正阿閉淡路守多  
賀新左衛門鳥山主殿助久徳六左衛門小川土佐守  
池田伊豫守以下四千餘騎とぞ聞えし是は朱雀と  
下りし九条四塚のゆりて進發は左備の津田與  
三郎志水嘉兵衛渡邊源左衛門ゆと七兵衛信澄  
の家老たりし信澄とゆし後光秀が手よ属  
てどありけるなりこれに從ふ侍の村上和泉守山  
本對馬入道仙入進士作右衛門伊勢安房守上野筑後  
守秋原讚岐守伊藤志摩守庄田權之助松田主膳ふ  
ととろしめ三千七百餘騎とゆあられ鴨河よと

大朝臣二編卷六

二



ひ稻荷深草より伏見ふり馳下る右備の伊勢  
 與三郎諏訪飛驒守藤田傳五郎同藤三御牧三左衛  
 門同勘兵衛渥美讚岐守櫻井新五左衛門逸見左助  
 香河刑部以下二千餘人これ梅津桂物集め寺戸  
 向日明神と尤も見て神足勝龍寺とさして打をこ  
 う中手の二陣の松田太郎左衛門と大将とて丹  
 波の七手并河掃部助同八助妻木忠左衛門荻野彦  
 兵衛波々伯部權頭加治石見守酒井孫右衛門和田  
 左助とさして太田小源太溝口伯耆守村山周防  
 守と加えたり次の光秀が旗本中津豊後守友綱却  
 牧孫十郎北田帶刀村上三十郎開田太郎八堀江三

の之同三大夫隱岐内膳と始として五千餘騎水色  
 小桔梗の紋付とる九本旗白紙の大垂付馬印を  
 おいて立て打出とて西ヶ岡の金丸小傳次同小三次  
 近邊のあつれとの共とりの集め五千餘人よてを  
 せ付たり光秀大に喜び大金市之丞と檢使とて  
 鉄炮二百挺とさして旗本の左先よてをさ  
 たり是は右手先のつうとたるん処へ切て入る  
 為とぞ知てこり

齋藤内藏助諫言の事  
 并柴田源左衛門意見の事  
 爰も光秀の頼切たる齋藤内藏助利三といふ丹



波國氷上郡春日井庄黒井の北なる井口山の城主  
とて光秀の妻の弟なる中備の先鋒と請取東寺  
四塚鳥羽久我繩手とおし行けるが八幡の洞ヶ峠  
ふ屯を筒井勢の消息とらめひそまり弟の大  
八郎と呼ぶ耳は口を云々と云ふくめしうバ大  
八心得馬引あへ光秀の本陣へ馳入バ光秀これ  
と近く招き何事ぞと問その時大八郎申けるは  
敵の勢を計りゆる大形三万餘騎と申ゆるこく二  
万六七千のいべし先手の高山右近二陣ハ中川瀬  
兵衛三陣池田勝三郎と見えゆ筑前守が旗本のい  
ま見えぬは但不審さハ筒井が勢もてハ必定筑

前守と内通したるめのとたわえゆその故ゆふ  
と申に羽柴が勢とも洞ヶ峠に備し筒井と敵と心  
得いそむあの方へむけく押えを置てゆくみ更ふ  
是をい見もをぬ様は振舞ひあを内通ありある  
しなれ味方山崎の町にて軍をてまたげふをたらし  
んとさ筒井味方の後を絶んとをゆるなるべし然  
者味方よとに難義の戦なるんりるあへく龜山へ御  
開さいて山本の谷合と切あさる日頃御備えあり  
し方便と專一遊むいべくハ  
山本谷合三所の落合といふハ船井郡鳥羽とい  
ふ処より上一流ハ栗田郡弓削山國の澗より



出る水なうこれと黒田めと云今一流の亀山  
より八里をめぐり先より出て海老坂川といふ今  
一流の三戸野の上より流し出て箕部水と云  
めし尤もなうこれと安土よさし置といは左馬助と  
よひ上坂本へ御人の方よりくるは坂本の湖水  
に船を浮へて兵糧運漕もあつた間爰まで敵を待  
いらんよ二ヶ月をくらへんとい何の難さといひ  
るその内は亀山より後詰りして出張し叡山と陣  
を取て敵と眼下に見たりし軍したらんよ一定味  
方勝利しうひなうといと申あつた光秀あれと聞  
あつて思案していうよ大八郎其方謀る処よ

これ理みあつていひごさうに其意見付て亀  
山への落る坂本へははむとめよよ西条も安  
さに似るよにめし筒井もあつたよ二心のあ  
らドその故に彼家をぞ滅亡をぐりける時よ  
光秀種々道理をつくり御取合をたればあつた筒  
井の家は立たんよされぬ数通の誓紙もい何ゆ  
えよ我等も弓を引つごさあまうに疑ひ深けれ  
ば却て味方の心を破る更し筒井も向ひく仇むを  
びとるよとなうれ次よ亀山へも坂本へも急に入  
たしといふ光秀の任をけがを身  
なり一戦も及むばして戦場を引退くと外聞實

大月巳二編六



義とも小難義といふべし筑前守が勢たといひ三万  
ともいへ四万ともいへいづれも時より従ふ鳥合の  
衆なり高山中川池田あど口の猛くとも心を元よ  
りつゝさちのものを一方をこに切崩さは次々の將  
基たを十の如く破れつべし左様のとみ心をいこ  
めんより隨身銳氣を養ひ進んで敵をうつこととた  
めひゆへとて大八郎をうへりけり大八らりりか  
つうその由を内藏助はほげりり内藏助大に仰  
天しこれるとの道理ふまらみ日州まのをうへりま  
さねども何とて左様のいひえりりやらん軍へか  
くるも引も始終の勝を以て専と今一度罷り向

あつて御旗本あつて某とのとされ御身ひそり  
坂本へ趣きあへゆといふことを懇にひそり申を  
こて返しあつとも光秀あつてあつ諸軍勢とつめ  
そや打立て旗をそり馬をそりりり序をりり  
と見合をさるちあつ向日の明神のうへに當りて馬  
けりあつてあつて見えりりけるあつ是に定りて高  
山り手のめあつてあつて猶豫しけるあつ敵をそり  
近づきぬとあつてあつ地の下人さるてあつてあつ大  
八郎あつてあつてあつて内藏助はむりひ今へりりとお  
ぶりめさせあつて我等り運もりりめさるりりゆゆぐ  
一軍して敵の目とさるてあつてあつてあつて山崎



さして急ぎゆく柴田源左衛門あれをみくひり  
内藏助と大將左様よりこれい上のこの軍必定  
破れつづく覺えひさうとて我等のこの年頃日頃  
福んごらよめしほりこれいその恩分のため  
をゆる命なり彼是といふべき由あり大八郎殿の  
御供をべくひといひをては是もあつて馬をけり  
内藏助これを見て兩人を呼りて百々をわどふ  
あひひ切り馳あふと天道さぞうりめでたやみら  
んたゞ一筑前守又駈むりひ打ここの軍に戦死し  
ていせんもういせめを筒井が裏切るとさか  
とを切くどいあへゆとて大八郎利次柴田源左衛

門と大將ととて一千餘人山崎のこあさなる狐川  
の渡りの西にあさう藪の一むらむらげとる所を小  
楯又とらひそまうめくひて大和勢のめくるとま  
つ心のうちあを猛うりげ  
一説は齋藤内藏助いづもして光秀を龜山へを  
とつその後敵と坂本へむりやと坂本の戦ひ急  
あゝんとさ龜山よりあれを援あべいと謀り  
めども光秀聞て山崎を向ひ遂に敗軍又及  
ぶといへり  
又一説は齋藤内藏助あさ黄地よあてまこの  
紋付たる旗二流吹あがさを金のむれん又銀の

大目已二編六



短冊六十枚つけたる馬印をたて十一日の夜  
勝龍寺へ入て擲州より上る勢を一見せんがた  
めよひそるゝ夫人足よそのとて廣瀬關戸の邊まで  
立越高山が先手とたしうよ見とめさて引く  
日向守よ坂本へ落しめしひゆうしとも云う

重修真書太閤記七編卷之六終



